ひむか メディア アクション
HIMUKA MEDIA ACTION

ひむかかるた通信 第7号

西池が優勝

個人は山田（田野）が悲願の頂点
19校130名が熱戦
第9回大会

第9回ひむかかるた大会が2月13日、宮崎公立大学体育館で開催された。宮崎市内の19学校から約130名が参加し熱戦を展開。その結果、団体の部は西池Aチーム、個人の部は田野小6年の山田沙弥さんが優勝した。前大会より出場校数が増え、会場は熱気に包まれた。ここでは、畳の上で真剣勝負を繰り広げる、子ども達の様子を紹介したい。（所属と学年は大会当時）

第9回大会の様子。130人が熱戦を繰り広げた

圧巻の団体制覇 かるたの真髄魅せつける

第9回ひむかかるた大会は、西池小学校Aチームが団体戦優勝。予選3試合の合計得点が100点を超えるなど、圧倒的な強さで頂点まで駆け上がった。普段の練習は、昼休みやクラブ活動のみだという。昼休みは3人で役札やその他の札の絵柄を覚えることや、どれだけ早く札をとれるかなどにゲーム感覚で取り組んではいたが、実戦的なものはあまりしていなかったという。

しかし、そんな遊び感覚の取り組みが信じられないほど、チームは予選の第1試合から頭角を現していた。読み手の「間」の置き方に踊らされることなく役札を確実に獲得。予選3試合の合計得点は112点で、出場全チームの中トップだった。決勝トーナメントでも、鮮やかな札さばきで実践モデル校や協力校を退け、決勝戦では3人とも役札を次々と奪い、余裕の表情で優勝を決めた。優勝決定後、3人で抱き合うなど喜びを爆発させていた。

試合後に相手と握手 礼儀も印象的

横山樹杏さん（5年）は「優勝が決まった瞬間は最高の喜びだった。まだまだ私たちは成長できると思っているので、来年の第10回の記念大会でも優勝して2連覇めざしたい」、下薗玲美さん（5年）も「2連覇して西池小がひむかかるたの王者であることをはっきりと証明したい」と、すでに来年に向けて気持ちは動いているようだった。

いよいよ来年は第10回大会。ひむかかるたにとって節目となる年だ。今回（第9回）はこれまでの中でも最高の白熱した試合が数多く繰り広げられた。西池小を始め、多くの小学校に来年の大会にはぜひとも参加を期待したい。

閉会式で表彰を受ける西池Aチームの3人

第9回大会結果

【団体戦】
・優勝＝西池A：横山樹杏（5）溝上未侑（5）下薗玲美（5）
・準優勝＝宮崎A：大平彩乃（6）佐藤優衣（6）下村愛海（6）
・第3位＝大塚C：川辺寿翔（4）吉本悠陽（4）戸髙龍真（4）
・第4位＝西池B：小宮まゆり（6）中島七海（6）中崎ひかり（6）

【個人戦】
・優勝＝山田沙弥（田野6）
・準優勝＝山岡美咲（江平6）
・第3位＝山本梨聖（潮見5）
・第4位＝木村隼（大宮6）

【敢闘賞】木村隼（大宮6）

ひむかコラム
相手への思いやり増える

今大会、選手数は小学校の部史上最多の133人に上り、大会内容も大いに充実した。ひむかかるた大会は9回を重ね、いよいよ骨太になりつつある。

今大会目立ったのは、相手への思いやりを持った選手が増えてきたことだ。試合後笑顔で対戦相手に歩み寄り握手しあう選手、負けても悔しさをじっとこらえ、礼節ある態度に徹する選手、チーム全員で並び、一礼して会場を後にする選手。相手選手への敬意あふれる彼らは、まさに「ひむかかるた精神」の体現者である。

ご存知の方も多いと思うが、ひむかかるたのキャッチフレーズは「みやざき大好きっ子をつくろう」である。しかしこれには続きがある。それは、「みやざき大好きっ子は、世界も大好き」だ。読み札の文言はかるた遊びを通じて身体にすりこまれ、思い出と身体感覚を伴う強力な記憶となり、それがみやざき愛の起点となる。と同時にこうした経験を共有することで、子供たちにはある種の「仲間意識」が生まれ、それが相互に思いやる心を作っていく。

共通体験は、相手への想像力の源でもある。それはやがて「ひむかかるた」「宮崎」という枠を超え、広く社会全体へと向かうことだろう。

「情報の流通」が「感覚の共有」に先んじすぎている現在の国際社会は、「危険社会」ともいわれる。今大会での思いやりあふれる子供たちのふるまいに、こうした「危険」を乗り越え、より良い社会を作る次世代の子供たちの力強さを感じずにはいられない。

ひむかかるた協会
会長　梅津顕一郎

交流戦　本大会前に腕だめし

第3回ひむかかるた交流戦が昨年11月28日、宮崎公立大で開催された。推進校など5校から15チームが参加し、本大会の前哨戦として熱い戦いを繰り広げた。勝敗の結果はともかく、各チームとも今回の交流戦を通じて大きな収穫があったようで、2月の大会へ向けて気持ちを高めていた。

宮崎市内5校が参加した交流戦は近くで見守れることも魅力

交流戦初参加 ドキドキの大塚小

毎年2月の本大会で上位に入る大塚小は、意外にも交流戦初参加だった。9チームと大所帯だが、初参加の4年生が大多数。緊張しつつも、他校との試合を楽しんでいた。

大塚小といえば、佐多修教諭が受け持つ4年生のクラスで授業にかるたを取り入れているほど熱心な学校だ。休み時間や放課後にかるたで遊ぶのはもちろん、授業では一部を隠した状態の絵札を言い当てるゲームや新しい役札づくりなどの教材として活用する。その分だけ他校よりもかるたに触れる時間が長く、子ども達も熱心だ。「かるたは好き？」との質問に、みんなそろって首を縦に振る。交流戦への参加も楽しみにしていた。

だが、交流戦会場の体育館に到着すると、どの子も緊張気味で開会式ではソワソワ。しかし、そこはさすがに大塚小。試合が始まると真剣な表情へと切り替わり、「はい！」と大きな声で札を取っていた。女子チームを組んだ4年生の川添未瑠亜さん、中森葉月さん、久保葵さんは「負けて悔しかったけど、本大会では頑張りたい」と声を弾ませた。

そうした子ども達の様子に佐多教諭は「2チームしか参加できない本大会とは違い、交流戦は全員が参加できる。大会の雰囲気も味わってもらえるし、他の学校と対戦することで友達になることもできる」と喜んでいた。

（宮崎公立大学3年・新開さくら）

小学生自身が審判を務めた

試合が終わるとみんな集まって記録を確認

製作／ひむかメディアアクション　発行／ひむかかるた協会
編集／古澤里奈、崎平結宇、中原理恵、森田陽子、益田有紗、藤島由芽、松崎環、新開さくら
山内麻稚、岩元萌葉、宮尾佳那、有吉千佳、近藤愛、永野百恵、山本彩未、大野智滉